

戦争時代の青春

松村モト 鹿沼市

●学徒出陣

昭和十七年、鹿沼高等女学校（現在の鹿沼高校）に入学しました。しかし、せっかく入学した学校だったのに、春、秋の農繁期には、人手不足の農家に手伝いに行かねばなりません。というのも、前年の昭和十六年には大東亜戦争（太平洋戦争）が勃発して、農家は働き手を兵隊にとられて人手不足だったからです。全校生徒、地区別に分かれ、田植え、稲刈り、サツマイモ、ジャガイモ堀りなど手弁当で出かけました。ところが、初めての農作業、何をやるっても苦勞の連続で疲れ果て、家に帰り着くと倒れてしまうありさまでした。

英語の授業も週に何時間かあったはずですが、英語は敵国語ですから、あまり重きをおかれません。日常の言葉にも英語は禁止されるようになりました。たとえばエプロンとは言わずに「割烹着」、ポケットは「隠し」、ハンカチは「手拭き」、という具合です。

そして、「パーマメントはやめましょう。生

まれた時の素直な髪の毛でいましょう」とパーマも禁止になりました。スカートも禁止で、みんなモンペをはきました。3年生になって戦争がはげしくなり、勉強どころではなくなりまして。

学徒動員で宇都宮市にある中島飛行機製作所宇都宮工場（現在の富士重工のある所）に毎日、省線（現在のJR）鹿沼駅から汽車に乗って通勤しました。

長い大きな工場の建物の西の端から順に飛行機の部品が作られてきて、東の端の私たちはエンジン（単発）の点火線を取り付け、それが最終工程でした。完成すると少し離れたところにあつた格納庫に納められました。その飛行機は神風特攻隊が敵をめがけて弾の代わりに突っ込むことになる飛行機（注：疾風はごと）です。

私たちも心をこめて一生懸命に作業に当たりました。軍需工場のことですから、アメリカの戦闘機B 29によく狙われ、空襲警報のサイレンが鳴りわたると、近くの山の中に走って逃げ込み、爆音の遠ざかるのを待ちました。終戦まじかのころは毎日のようにそれが繰り返されました。

学生時代はセーラー服ではなく、作務衣のような上着とモンペを母親の着物一枚から作り

直して着ていました。そこに防空頭巾と、非常食を入れた布袋を、左右の肩に交互にかけて通勤していました。無事に家に帰れるかどうか、わからないような毎日でしたから、袋には白い布に住所、名前、学校名、血液型を書いて縫い付けてありました。袋の中の非常食は米粒や大豆（手に入りにくかった貴重品）、カボチャの種などを炒って缶に入れたものです。今日も無事に家に帰れますように、と祈りながらの通勤でした。



●家庭では

開戦後まもなく、食糧も衣料も不足するようになりまして。鉄砲や大砲、弾などを作るための鉄を供出するよう達しがあり、鍋、釜、たらい、蚊帳の吊り輪まで、鉄類はみんな供出しました。

東京など都会の子供たちが、戦禍を避けるために鹿沼にも集団で疎開していました。家族と

離れてお寺などに寝泊まりし、地元の学校に通ったのです。

東京など空襲がはげしくなって、人間だけでなく荷物が疎開することもあり、東京の知人の荷物を預かったことがあります。しかし、鹿沼も安全とはいえない状況になり、預かった荷物を何回かに分けてリヤカーに積み、板荷の知り合いに預けなおしました。そのとき積み荷の後押しを手伝い、その家で「蕎麦がき」を「ごちそう」になったのです。生まれて初めて食べた蕎麦がきのおいしかったこと。そしてお腹いっぱいになり、大満足したことを今でも忘れることができます。いつもお腹がすいていて、腹いっぱい食べる、なんてことはなかったのです。

●空襲の思い出

鹿沼でも空襲がありました。当時は上材木町に住んでいました。夜、電球の明かりが外に漏れないようにと、黒いきれで覆っていたので、いつも薄暗かったのですが、空襲のサイレンが鳴ると、急いで電気を消しました。そして父親は、焼夷弾が落下したとき家が焼けないように消火作業のために家に残り、母親は位牌をはじめ大事なものを持ち、私が下の弟を背負い、妹が上の弟の手を引いて宝蔵寺の先の山に逃げました。焼夷弾があちこちに投下されて、昼間

のように明るく、焼け落ちる家を目の前に、生きた心地もなく、呆然と恐ろしさに震えながら眺めているしかありませんでした。

●何もかもが不足する生活

開戦後、まもなく、食糧も衣料も手に入りにくくなりました。お米、衣類、履物すべて切符の配給制で、しかも誰にもわたるのではなく、少しかだけ隣組に配給になって、くじを引いて交互に分け合うありさまでした。一族に一冊のお米の通帳があり、家族の年齢別にグラム数が決められていました。とても満足できるほどの量はなく、空腹を満たすために釜の中にはお米のほか、大根や芋を入れたりしました。主食として配給になったものはほかに、麦、サツマイモ、サツマイモの粉、とうもろこし、うどん（小麦粉だけではなくどんぐりの粉も混じっていた）、コッペパンなど。お腹を満たすには野辺に生えているハコベ、オオバコの葉、サツマイモのつるも食べました。

家にあつた上等の着物や洋服類などを、自転車に乗って知らない農家に行つて、お米や小麦粉、芋、かぼちゃなどと交換してきたこともありました。若い娘盛りだったけれど、恥ずかしいとは言つていられなかった。口に入るものがあれば、何でもよかったです。国の配給制度

を厳格に守つて、「ヤミの食糧を口にしないという判事が餓死した」ということが当時美談として話題になったのですが、餓死した人も多かつたと聞きます。

燃料の薪も手に入らなかつたので、妹と日曜日ごとに山に行つて、枯れ枝を拾い集め、束ねて背負つて帰つてきた。生きていくためには、いろいろがんばらねばならなかつた。皆、「お国のため、勝つまでは」の合い言葉のもと、生活のすべてが不足して困窮しているのに、不満を言わず耐えてがんばつたのです。

お風呂も時々しか入れず、石けんもありませんでした。洗濯物はたらいに入れて、もみ板で「ごしごし」洗いました。エゴの木の実を割つて皮をもむと泡が出たので石けんの代わりに使いましたが、実際には、汚れが落ちていたのかは不明。髪も思うように洗えませんから、ノミやシラミがいつぱいいて、体中かゆかつた。終戦後、アメリカから来たDDTの白い粉を頭に振りかけられて、顔まで真っ白だったのを記憶しています。これは特別な家のことではなく、普通の家庭でもどこでもそんなものでした。

もし敵が上陸してきたら、という想定の下、竹やりで敵を突く練習、焼夷弾が落ちてきたらもみ消す訓練、など、それがどれほど役に立つ

ものか怪しいが、国からの指示を忠実に守って、みな一生懸命でした。幸い、訓練だけで済んだけれど。

少女時代、人生の一番輝かしいはずの年頃は戦争の時代だったのです。終戦を迎えてもしばらくは食糧、衣料、生活のすべてが落ち着くまでには大分間がありました。女学校で卒業証書はもらったものの、勉強はあまりしていません。

あれから60年以上……。80歳を超えた身では、体も自由には動かず、あの頃の青春をやり直すことは、残念ながらできそうにありません。それでも私はまだいいほうでしょう。出征して帰ってこられなかった多くの人たち、いまだ他国の地で遺骨もそのまま、お国のために身を粉にして尽くした人もおられるのです。今では戦争を知らない人たちが多数となり、あの頃の苦しみ、悲惨さを知る人は少なくなりつつあります。

二度と戦争は起こしてはいけません。そして、あらゆるものを粗末にしないで、もったいないという気持ちを忘れることなく、また、今日の平和の礎を築いた多くの犠牲者を忘れることなく、世界中が平和であることを祈念します。